

Beck Depression Inventory-II についての一考察

林 潔・神田 信彦*

目 的

A.BECK (1976) は抑うつ形成の要因について、素因-ストレス・モデルを設定し、認知的アプローチによる心理療法すなわち認知療法 (Cognitive therapy) を発展させている。BDIすなわち Beck Depression Inventoryは、BECKらによって作成された抑うつ傾向査定の尺度である。

BDIは対象とされる症状の適用範囲が広範囲であるという点や、臨床集団と類比集団の療法において有用であるという利点を持ち、潜在的臨床集団も学生集団においても幅広く用いられている (WILLIAMS 1983)。

このBDIの1978年版は、特に認知行動療法^{注1)}における査定の手続きとして世界的に広く用いられている。この尺度は特に抑うつに対する認知行動療法の効果測定のための手続きとしても活用されている。

1978年版のBDIは、その後小規模の修正が行われた (林・塚本 1987)。そしてさらに、BDI-II (BECK, STEER, & BROWN 1996) として改訂された^{注2)}。

従来のBDIがBDI-IIへと改訂された結果、若干の項目は内容が再調整されている。

1978年版のBDIと対比したBDI-IIの21項目のタイトルは、表1のとおりである (カッコ内は旧項目)。

BDI-IIの基本的な回答様式は、従来のパターンを継承している。

ただし項目については、このように21項目中の13項目が項目名が変更されており、各項目に対応する選択肢の内容も若干修正されている。

本研究では、このBDI-IIの妥当性と信頼性について検討する。

あわせて学生集団を対象とした、日米のBDI-IIの結果の比較を行う。

Kiyoshi HAYASHI and Nobuhiko KANDA : A study on the Beck Depression Inventory-II

*文教大学人間科学部 (Faculty of Human Sciences, Bunkyo University)

注1) 認知療法を含む。なお認知療法は広義には認知行動療法と同義に用いられることがある。狭義にはA.BECKの立場を示す。

注2) BDI-IIについては、小嶋・古川版 (2003) が公刊された。

表1 BDI-IIとBDIの項目の比較

1. 悲哀感（ムード）	12. 興味の喪失（社会的退却）
2. ペシミズム	13. 未決定
3. 過去の失敗（失敗感）	14. 無価値感（身体像）
4. 喜びの喪失（不満足感）	15. エネルギーの喪失（仕事の抑制）
5. 罪悪感	16. 睡眠様式の変化（睡眠の不全）
6. 罰を受けている感じ	17. 怒り易さ（疲れやすさ）
7. 自己嫌悪	18. 食欲の変化（食欲のないこと）
8. 自己非難	19. 集中の困難さ（体重減少）
9. 自殺念慮か願望（自罰願望）	20. 疲労感（身体への先入感）
10. 泣きたい気持	21. 性への興味の喪失（リビドーを欠く）
11. いらいら感	

方 法

BDI-IIは、21項目からなる4件法の質問紙である（付録参照）。

このBDI-IIとYG性格検査とを、首都圏の大学生男子140人、女子200人、合計340人の被検者に実施した（2002年11月－2003年6月）。

BDI-IIの各項目についての項目分析を行った結果、21の全項目が採用された。

結 果

被検者のBDI-IIの結果は、表2のとおりであった。

この結果、3.過去の失敗、4.喜びの喪失、16.睡眠様式の変化への反応が比較的高いことが理解できる。

被検者のYG性格検査の結果は、表3のとおりであった。

この結果女子のR.のんきさが、やや高い傾向にあった（標準点4, 5に入るもの^{注3)}）。なおこの場合の「のんきさ（rhythmia）」とは、人と一緒にはしゃぐ、いつも何か刺激を求めるなどの、気がるな、のんきな、衝動的な性質と定義されているものである。

BDI-IIの21項目間相互の相関は、表4-1および表4-2のとおりであった。

このBDI-IIの結果について、varimax法による因子分析を実施した。因子の抽出はBECK *et al.* (1996) にあわせて、男女ともにそれぞれ2因子を抽出した（表5）。

注3) YGの得点はパーセンタイル得点を標準点でカテゴライズして高低を判断する。この場合標準点4と5の箇所に該当するものを高得点とみなした。

表2 BDI-IIの結果

	男 子		女 子	
	M	SD	M	SD
1. 悲哀感	.31	.55	.38	.74
2. ペシミズム	.69	.87	.77	.88
3. 過去の失敗	1.02	.84	1.08	.95
4. 喜びの喪失	1.41	.52	1.39	.58
5. 罪悪感	.75	.87	.64	.84
6. 罰を受けている感じ	.61	.93	.48	.82
7. 自己嫌悪	.53	.79	.66	.89
8. 自己非難	.56	.79	.50	.78
9. 自殺念慮か願望	.32	.62	.26	.56
10. 泣きたい気持	.35	.85	.81	1.09
11. いらいら感	.56	.74	.50	.68
12. 興味の喪失	.34	.64	.31	.68
13. 未決定	.42	.70	.58	.87
14. 無価値感	.37	.71	.52	.81
15. エネルギーの喪失	.65	.89	.69	.90
16. 睡眠様式の変化	.93	.83	.93	.69
17. 怒りやすさ	.29	.62	.25	.52
18. 食欲の変化	.63	.80	.79	.74
19. 集中の困難さ	.72	.87	.67	.79
20. 疲労感	.72	.60	.73	.56
21. 性への興味の喪失	.21	.54	.27	.65
合 計	12.29	9.21	13.06	9.50

表3 YG性格検査の結果

	男子		女子	
	M	SD	M	SD
D. 抑うつ性	11.52	5.71	12.20	6.01
C. 回帰性	10.19	4.92	11.20	5.13
I. 劣等感	10.11	5.08	10.82	4.98
N. 神経質	11.83	4.95	11.19	4.89
O. 客観性	10.44	4.26	10.32	4.05
Co. 協調性	9.83	4.24	8.57	4.07
Ag. 攻撃性	11.26	3.78	10.34	4.11
G. 一般的活動性	10.98	4.94	10.16	4.69
R. のんきさ	12.08	4.43	12.05*	4.36
T. 思考的外向	8.03	4.78	8.63	4.39
A. 支配性	9.59	4.70	9.75	4.87
S. 社会的外向	11.67	5.26	11.89	5.09

* 標準点4と5に入った得点

男子の第I因子で突出している項目は、4.喜びの喪失、7.自己嫌悪、15.エネルギーの喪失、20.疲労感である。第II因子で突出している項目は、16.睡眠の不全、18.食欲の変化、19.集中の困難さ、20.疲労感である。第I因子を情動の抑制の因子、第II因子を身体的側面の因子と命名した。

女子の第I因子で突出している項目は、4.喜びの喪失、15.エネルギーの喪失、19.集中の困難さ、20.疲労感である。第II因子で突出している項目は、3.過去の失敗、5.罪悪感、7.自己嫌悪、8.自己非難、9.自殺念慮か願望である。第I因子は男子の第I因子と同様である。第II因子を自己否定感の因子と命名した。

なおBDI-IIのアメリカ版 (BECK *et al.*, 1996) では、第I因子で突出しているものは悲哀感、過去の失敗、喜びの喪失、罪悪感、罰を受けている感じ、自己嫌悪、自己非難、自殺念慮か願望、泣きたい気持、いらいら感、興味の喪失、未決定、無価値感、怒り易さである。第I因子は、抑うつ認知-感情的側面の因子と命名されている。第II因子で突出しているものはエネルギーの喪失、睡眠様式の変化、食欲の変化、集中の困難さ、疲労感である。第II因子は、抑うつ身体的側面の因子と命名されている。

われわれの結果ではBDI-IIの構成因子は、必ずしもこのような認知-感情、身体の要因というレベルでは分離されなかった。

BDI-IIの得点とYGの12の特性との相関は、表6のとおりであった。

この場合、YGの抑うつ性、回帰性傾向、劣等感、神経質、客観性、協調性の特性がBDI-

表5 BDI-IIの因子分析結果

	男 子			女 子		
	I	II	h^2	I	II	h^2
1	.349	.281	.20	.216	.144	.07
2	.179	.217	.08	.294	.347	.21
3	.283	-.164	.11	.166	.785	.64
4	.820	.063	.68	.552	.121	.32
5	.280	.109	.09	.134	.662	.46
6	.064	.146	.03	.124	.295	.10
7	.418	.145	.20	.275	.451	.28
8	.105	.174	.04	.235	.442	.25
9	.118	.147	.04	-.147	.461	.23
10	.092	.153	.01	.131	.045	.02
11	.247	.124	.08	.196	.109	.05
12	.172	.142	.05	.179	.071	.04
13	.170	.088	.03	.276	.171	.11
14	-.135	.065	.02	.170	.209	.07
15	.479	.329	.34	.681	.112	.46
16	.209	.790	.67	.251	-.055	.07
17	.096	.153	.01	.181	.013	.03
18	-.050	.806	.65	.167	.137	.05
19	.026	.450	.20	.684	.149	.49
20	.477	.404	.39	.743	.097	.56
21	.081	.150	.03	.035	.102	.01
寄与率	36.128	7.905		36.362	6.748	
累積寄与率	36.128	44.033		36.362	41.311	

IIで測定される抑うつ傾向と、男女共通して特に相関が見られた。

BDI-IIの各項目とYGの抑うつ(D)との相関は、表7のとおりであった。この場合男女に共通して特に相関のみられた項目は、1.悲哀感、2.ペシミズム、3.過去の失敗、7.自己嫌悪、8.自己非難、15.エネルギーの喪失、20.疲労感であった。

表6 BDI-IIとYGの特性との相関

	男子	女子
D. 抑うつ性	.535	.590
C. 回帰性	.449	.420
I. 劣等感	.399	.414
N. 神経質	.530	.481
O. 客観性	.502	.491
Co. 協調性	.510	.501
Ag. 攻撃性	.215	.040
G. 一般的活動性	-.278	-.364
R. のんきさ	.016	-.060
T. 思考的外向	-.116	-.263
A. 支配性	-.269	-.233
S. 社会的外向	-.202	-.191

折半法（前半と後半の項目）によって、BDI-IIの信頼性を検討した。その結果、0.754の相関係数が算出された。

なおこのBDI-IIの得点とアメリカのカレッジ集団の結果（BECK *et al.*, 1996）と比較すると、表8のとおりとなった。

日米の比較の結果で特に差が著しいものは、17（怒りやすさ）であった。アメリカのカレッジ集団の平均が0.73（SD 0.83）であるのに対して、わが国の場合は男女それぞれ0.29（SD 0.62）、0.25（SD 0.52）の得点であった。

考 察

BDI-IIの得点とYGの抑うつ（D）尺度の得点と相関が見られたことから、BDI-IIの妥当性が認められた。また折半法の結果から信頼性が認められた。

また特にBDI-IIで測定される抑うつ傾向とYGの客観性との相関が高いことは、抑うつ傾向のある人々の認知の傾向、すなわちこれらの人々は認知の歪みをもつ傾向があるということを示唆するといえる。また抑うつ傾向と協調性との相関が高いことは、抑うつ傾向が、人々の行動様式に制約を与えることを示唆するものであろう。

またYGのD尺度と特に関連のあるBDI-IIの項目、悲哀感、ペシミズム、過去の失敗、自己嫌悪、自己非難、エネルギーの喪失感、疲労感は、日常的に比較的体験されやすい

表7 BDI-IIの各項目とYGの抑うつとの相関

	男子	女子
1	.387	.424
2	.419	.445
3	.384	.378
4	.345	.437
5	.244	.368
6	.369	.305
7	.445	.472
8	.357	.415
9	.234	.276
10	.175	.317
11	.347	.391
12	.299	.265
13	.344	.283
14	.349	.424
15	.389	.446
16	.288	.254
17	.209	.192
18	.259	.177
19	.328	.468
20	.458	.370
21	-.018	.222

抑うつ関連の感情であるといえる。ここにいわゆる臨床集団ではない被検者の特徴をうかがうことができる。なお本研究の結果と、BDI-IIについての小嶋・古川（2003）の結果とは得点の分布に差異が見られた。これには特に被検者の年齢構成が大きく関与しているものと考えられる。

日米の比較の結果では、怒りやすさに大きな差異がみられた。従来日本人は、感情表現、特にネガティブな感情を抑制する文化の中に生きてきていた。この雰囲気は変化しつつあるとはいえ、若い人々であっても、引き続いてネガティブな感情を抑制する文化の影響を受けていることを示唆するものといえよう。またこれはアジア系アメリカ人の場合であっ

表8 BDI-IIの得点の日米学生集団の比較

1. 日米が同程度の反応の項目	9. 自殺念慮か願望	16. 睡眠様式の変化	21. 性への興味の喪失
2. アメリカの反応が高い項目	1. 悲哀感	8. 自己非難	11. いらいら感
	12. 興味の喪失	17. 怒りやすさ	20. 疲労感
3. 男子はアメリカが高く、女子は同程度の反応の項目	6. 罰を受けている感じ	7. 自己非難	19. 集中の困難さ
4. 男子はアメリカが高く、女子は日本が高い項目	10. 泣きたい気持	18. 食欲の変化	
5. 日本の反応が高い項目	3. 過去の失敗	4. 喜びの喪失	5. 罪悪感
6. 男子は同程度、女子は日本の反応が高い項目	2. ペシミズム	13. 未決定	14. 無価値感

ても、情動のdistressについて自己と他者の認知に一致度が少ないというOKAZAKI (2002)の結果にも通じるところがある。

BDI-IIについては、今後多角的に検討を進めていく。

参考文献

- BECK,A.T. (1976) *Cognitive therapy and emotional disorders*. Mark Paterson and International University Press,Inc.
- BECK,A.T.,RUSH,A.J.,SHAW,B.F. and EMERY,G. (1979) *Cognitive therapy of depression*. N.Y. : Guilford Press.
- BECK,A.T.,STEER,R.A. and BROWN,G.K. (1996) *BDI-II manual*.San Antonio : The Psychological Cooperation.
- 林潔・瀧本孝雄 (1991) Beck Depression Inventory (1978年版) の検討とDepressionとSelf-efficacyとの関連についての一考察 白梅学園短期大学紀要 27 : 43-52.
- 林潔・塚本嘉寿 (1987) Beck Depression Inventory (新改訂版) についての検討 埼玉大学紀要 (総合篇) 6 : 45-57.
- 小嶋雅代・古川寿亮 (2003) 日本版BDI-II ベック抑うつ質問票手引き 日本文化科学社
- OKAZAKI,S. (2002) Self-other agreement on affective distress scale in Asian Americans and White Americans. *Journal of Counseling Psychology* 49 : 428-437.
- SPRINKLE,S.D., LURIE,D., INSKO,S.L., ATKINSON,G., JONES,G.L., LOGAN,A.R. and BISSADA,N.N. (2002) Criterion validity, severity cut scores, and test-retest reliability of the Beck

Depression Inventory- II in a university counseling center sample. *Journal of Counseling Psychology*, 49 : 381-385.

WILLIAMS, J.M.G. (1983) *Psychological treatment of depression*. (中村昭之訳 1993 抑うつ
の認知行動療法 誠信書房)

はやし きよし (心理学)

かんだ のぶひこ (心理学)

付録

BDI- II

- ・この質問票は21のグループから構成されています。
- ・それぞれのグループの文を注意深く読んでください。
- ・その中から今日を含め最近2週間にあなたが感じてきたことを最もよく言い表している文を選んでください。
- ・そしてあなたが選んだ文の番号を○で囲んでください。
- ・もし同じグループの中のいくつかの文が同じくらいあてはまるような時は、大きい番号の文を選んでください。
- ・どのグループもかならず一つだけを選んでください。

Q1 0. 悲しい気分ではない。

1. 多くの時間、悲しい気分だ。
2. ずっと悲しい気分だ。
3. がまんができないくらい悲しく不幸な気分だ。

Q2 0. 自分の将来に希望を失っていない。

1. いつもより自分の将来に希望を持ってない。
2. ものがとがうまく運ぶようには思えない。
3. 自分の将来は絶望的で、悪くなるばかりだ。

Q3 0. 失敗感はない。

1. しなくてもよい失敗をしてきた。
2. 振り返ってみると、多くの失敗をしてきた。
3. 私は全くだめな人間だ。

Q4 0. 以前と同じように楽しい気分だ。

1. 以前のように物事を楽しめない。
2. 以前楽しかったことも、少しも楽しくない。
3. 以前楽しかったことから何の楽しみも感じられない。

- Q5 0. 特に罪悪感を感じない。
1. 自分がしてきたことや、すべきだった多くのことに罪悪感を感じる。
 2. しばしば罪悪感に苦しむ。
 3. 常に罪悪感に苦しむ。
- Q6 0. 自分が罰を受けているとは思わない。
1. 自分が罰を受けるかもしれないと思う。
 2. 自分は罰を受けるのではないかと思う。
 3. 自分は罰を受けていると思う。
- Q7 0. 以前と変わらない自分だ。
1. 自分に自信をなくしている。
 2. 自分に失望している。
 3. 自分のことは嫌いだ。
- Q8 0. ふだんよりも自分を非難すること責めることもない。
1. ふだんよりも自分を責めている。
 2. すべての自分の失敗で自分を責めている。
 3. すべてのわるい出来事は自分のせいであると思う。
- Q9 0. 自分で死のうなどとは少しも思わない。
1. 死にたいと思うが、実行しようとは思わない。
 2. 死んでしまいたい。
 3. もし機会があったら自殺するだろう。
- Q10 0. これまで以上に泣くことはない。
1. これまでより泣いている。
 2. ほんのささいなことでも泣いてしまう。
 3. 泣きたいと思うが、泣くことができない。
- Q11 0. これまで以上に、不安でも心が傷ついてもいない。
1. これまでよりも、不安で心が傷ついている。
 2. じっとしていられないくらい不安で動揺している。
 3. 体を動かしたり、何かをしていないと不安でたまらない。
- Q12 0. 他人や物事への興味を失っていない。
1. 以前よりも他人やものごとに興味がない。
 2. 他人やものごとへの大部分の興味がなくなった。
 3. 何事にも興味を持つことができない。
- Q13 0. これまでと同じような判断力がある。
1. いつもと同じようにはものごとを決めることができない。
 2. 物事を決めるのに、これまでよりも多くの困難を感じる。

3. 何も決めることができない。
- Q14 0. 自分が価値がないとは思わない。
1. これまでと同じように自分が価値があり役立つ人間だとは思えない。
 2. 人と比べて自分は価値のない人間だ。
 3. 私は全く価値のない人間だ。
- Q15 0. これまでと同じように元気がある。
1. これまでと同じような元気はない。
 2. 物事をうまくできる十分な元気がない。
 3. 何かをする十分な元気がない。
- Q16 0. これまでと睡眠時間は変わらない。
- 1a. これまでよりも多少多く眠っている。
 - 1b. これまでよりも多少眠りが少ない。
 - 2a. これまでよりもかなり多く眠っている。
 - 2b. これまでよりもかなり眠れなくなっている。
 - 3a. 1日の多くを眠っている。
 - 3b. これまでよりも1, 2時間早く目が覚めてしまい, その後眠れない。
- Q17 0. これまでよりも怒りっぽいことはない。
1. これまでよりも怒りっぽい。
 2. これまでよりもずっと怒りっぽい。
 3. 四六時中怒りっぽい。
- Q18 0. これまでと比べ食欲に変わりない。
- 1a. これまでと比べると食欲が多少落ちた。
 - 1b. これまでと比べると多少食欲が増加した。
 - 2a. これまでと比べると食欲がかなり落ちた。
 - 2b. これまでと比べると食欲がかなり増加した。
 - 3a. 食欲が全くない。
 - 3b. 常に食べ物が欲しい。
- Q19 0. これまでと同じように集中できる。
1. これまでと同じようには, 集中できない。
 2. 何かを長い時間憶えておくことが難しい。
 3. 何事にも集中できない。
- Q20 0. これまでと比べ心身が疲れてはいない。
1. これまでと比べて疲れやすい。
 2. 疲れているので, これまでできた多くのことができない。
 3. 疲れているので, これまでできたことがほとんどできなくなった。

- Q21 0. 性に関する関心は変わりはない。
1. これまでに比較して性に対する関心が少なくなった。
 2. 今、性に対する関心がほとんどなくなった。
 3. 性に対する関心が全くなくなった。

訂正

白梅学園短期大学紀要36号（2000），79-89頁掲載の星と波テストの論文中のテストの名称の記載を，以下のように訂正いたします。

正 **Der Sterne-Wellen-Test**

誤 **Streme-Wwlen Test**
